

観
世
流

緑泉会

能 胡蝶 新井麻衣子
 能 狂言 太刀奪 大藏吉次郎
 能 櫻川 桑田 貴志

Kanzeryu Nob-Theatre

Ryokusenkai



平成30年 第1回例会

2.4 [日] PM1:00~ (開場12:00)

喜多六平太記念能楽堂

能 胡蝶胡蝶ノ精 新井麻衣子

能 所ノ者 大藏 教義 大鼓 大倉慶乃助 太鼓 桜井 均
謙吉 小鼓 鳥山 直也 笛 熊本俊太郎

後見 墨 敬子 地謡 河井 美紀 鈴木 啓吾
津村禮次郎 中森健之介 中森 貫太
坂 真太郎 中所 宜夫 恒治

〔休憩二十分〕

狂言 太刀奪 太郎冠者 大藏吉次郎 使イノ者 榎本 元
主 宮本 昇

仕舞 高 砂 中森健之介
俊成忠度 杉澤 陽子
藤 戸 中所 宜夫 佐久間二郎
中森 貫太
津村禮次郎 坂 真太郎

〔休憩十五分〕

能 櫻子 桑田 大志郎 大鼓 良勝 笛 一噌 隆之
母 桑田 貴志 小鼓 幸 正昭
狂女 森 常好 大鼓 幸 正昭
從僧 森 常太郎 小鼓 幸 正昭
從僧 則久 英志
人商人 殿田 謙吉

後見 奥川 恒治 地謡 河井 美紀 吉留 敬高
中所 宜夫 坂 藤村 眞太郎 眞太郎 啓吾

附祝言 【終了予定 午後五時】

許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。
演能や他のお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場合によっては退場頂く事もございますのでご了承下さい。

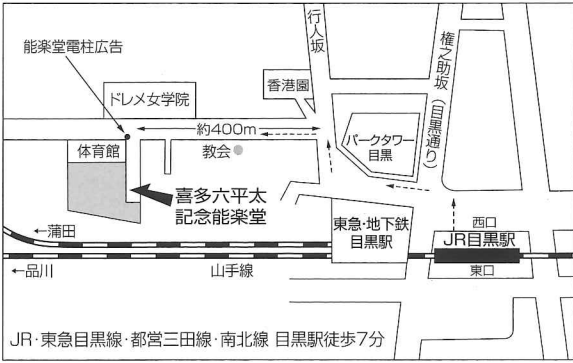
2018. 2. 4 [日] PMI:00 (開場I2:00)

喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 品川区上大崎4-6-9 TEL 03-3491-8813

JR・東急目黒線・地下鉄三田線・南北線の目黒駅西口より徒歩7分。
香港園手前の道を左折し約400m直進、杉野学園体育館手前を左に入る。

※駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮下さい。



●入場料
会員券(年4回)……一般 20,000円 学生 10,000円
1回券(当日券)……一般 6,000円 学生 3,000円

●申込先：各出演能楽師または緑泉会まで
新井麻衣子 TEL・FAX 04-2946-8389
桑田 貴志 TEL・FAX 03-3643-0891

〒184-0005 東京都小金井市桜町2-7-18
緑泉会 tel. 042-386-2131 fax. 042-386-2132

能 胡蝶こちやう

吉野の奥に住む僧(ワキ)が、花の都を見物しようと上京し、一条大宮のあたりにやつて来る。そこに由緒ありげな古宮があり、梅が今を盛りと美しく咲いている。僧が立ち寄って眺めていると、一人の女性(前シテ)が現れ声をかけ、この御殿や梅の木について語る。僧は喜び、女の素性を問いたですと、実は自分は人間ではなく胡蝶の精だと明かす。そして、春、夏、秋には草木の花をめぐる事ができるが、梅の花に縁のないことを嘆き、法華経の功德を受けたいと言う。莊子が夢で胡蝶になったという故事や、光源氏が童に胡蝶の舞を舞わせ御船遊びをなさったことなどを語りつつ、もう一度、夢の中でお会いしましょうと夕空に消えていく。(中入)

僧が、所の人(テイ)からこの古宮や胡蝶の話聞き、梅の木陰に仮寝をしていると、その夢に胡蝶の精(後シテ)が現れる。法華妙典の功力によって、梅花とも縁を得たことを喜び、花に飛びかう胡蝶の舞を見せ、やがて春の夜の明けゆく空に、霞にまぎれて去ってゆく。

狂言 太刀奪(たちばい)

太郎冠者とその主人は、參詣中、よい太刀を持った男を見つけ、その男の太刀を奪おうと計画する。しかし逆に脅され、太郎冠者は主人から預かった刀を奪われてしまう。刀を取り戻すために男を待ち伏せしていると、男が通りかかり主人が後ろから捕まえる。主人が太郎冠者に縄で男を縛れと命じると、太郎冠者は悠々と縄を綱いはじめ、縄が綱えると、男に縄をかけようとするが……

仕舞 高砂(たかさご)：高砂の浦から住吉を訪ねた阿蘇友成の前に住吉明神が現れ、悪魔を払い、君民の長寿を寿ぎ、平安な世を祝福する舞を颯爽と舞う。

俊成忠度(とんせいでい)：僧の前に現れた歌人忠度の亡霊。一の谷の合戦で討ち死にし、今まさに墜ちている修羅道での激しい合戦の様を見せるが、自身の歌によって呵責を逃れ、夜明けと共に桜の木陰に消えていく。

藤戸(ふじと)：盛綱に殺されてしまった漁師の亡霊は、身の不運を嘆く。殺された時の有様を再現して見せ、悪龍となって恨みを晴らすかと思ったが、回向を受けたので成仏の身になったと告げて消える。

能 櫻川(さくらがわ)

母の労苦に心を痛め、みずから人商人に身を売った桜子。その代金と手紙を母に渡してくれと頼まれた人商人(ワキツ)は、母を訪ねる。子の身売りを知った母(前シテ)は、悲しみに心を亂し、氏神の木華開耶那に我が子の無事を祈り、桜子の行方を尋ねる旅に出る。(中入)

それから三年がたち、遠く常陸国の桜川はちょうど桜の季節。桜子は磯辺寺に弟子入りしており、師僧(ワキ)に誘われて近隣の花の名所の桜川に花見にやってくる。一行の前に狂女(後シテ)が現れ、九州からはるばるこの東国まで我が子を探してやっ来て来たことを語る。そして失った子の名前も桜子、この川の名も桜川、何か因縁があるのだから、どうして我が子の桜子は咲き出でぬかと嘆く。さらに桜を信仰する謂れや我が子の名前の由来、桜を詠じた歌などを語り、落花に誘われるように、桜子への思いを募らせて狂女の極みとなる。僧は、これこそ稚児の母であると悟り、母子を引き合わせる。母は正気に戻って嬉し涙を流し、親子は連れ立って帰っていく。

●平成30年第2回例会……5月19日(土)

能……清経……杉澤 陽子
能……天鼓 弄鼓之舞……津村禮次郎